

地球温暖化と部屋にある大量プラスチック

誰もが正しいことだと理解しているのに、それが必ずしも行われなかったことがある。地球温暖化（気候変動）対策もその一つであろう。環境省によると、世界のプラスチック生産量は1964年からの50年間で20倍以上の年間約3億トン。その内、毎年少なくとも800万トンが海に流出し、このままでは2050年までにプラスチックが世界中の魚の総重量を上回るという予測もある。出張でホテルに泊まった時に、歯ブラシやクシといったアメニティグッズが部屋に置かれなくなり、チェックイン時に必要に応じて持っていくようになったのも、温暖化対策の一つである。だが、そんなことだけではとても気温上昇を抑えることはできない。未だに、十分なほどに温暖化対策が進まないのはなぜだろうか。

2020年にデンマークで製作されたドキュメンタリー「地球温暖化はウソ！世論を動かすプロの暗躍」によると、そのタイトル通り、巨大石油会社から資金提供を受けた一部の科学者や大学教授が温暖化懐疑論者になって世論をコントロールしたため、温暖化対策が数十年遅れたとのこと。さらに、こうした懐疑論者の一部は20世紀の中頃にはタバコ業界からの寄付を受け、受動喫煙の影響も否定していたらしい。つまり、対策が進むことで不利益を被る団体が、金と権力を用いて世論（社会意識）を変えたということか。

それ以上に驚かされたのが、2021年にフランスで制作された「脳にだまされるな 環境危機とどう向き合う」。このままでは地球が人の住めない星になるという事実を誰もが理解しているにも関わらず、二酸化炭素の排出量を押さえるライフスタイルを取らない理由として、我々の脳のメカニズムについて分析した科学ドキュメンタリーである。

物事を現実と異なるゆがんだ形で認識する現象（脳のメカニズム）を「バイアス」というが、ここでは温暖化対策を邪魔するいくつかのバイアスが取り上げられている。悪いことが起こる可能性があっても、それは遠い未来のことだと考える「認知バイアス」。地球温暖化が進んでも、自分は他人よりひどい影響を受けないと考える「楽観バイアス」。自分の信念に反する情報を無視する「確証バイアス」。このバイアスでは自分の考えと異なる情報を脳は意図的に拒む。脳自体が情報を受けつけないようにする。つまり、タイトル通り、我々は地球温暖化に関して、脳にだまされているというわけである。

国レベルの政策が十分に進まないと、温暖化対策に関する個人のささやかな努力などいっぺんに帳消しになりかねない。「脱プラ」一つにしても、世の中の商品は使い捨て前提のものがほとんどだから、モノを生産する段階からその考え方を変えないと、消費者の努力だけでは限界がある。それでも、大人には子どもたちに「モノを買うなどのさまざまな行為や生活習慣が、環境にどんな影響を与えるかいちいち考えないといけない」と教える義務がある。

「偉そうに言って！自分だって部屋には山のようにCDを買い集めてるくせに」という非難を家族から受けてもたじろぎません。だって、音楽コレクターなので大量にCDを買っても、これまで1枚たりとも手放してはいません。つまり、1mgも温室効果ガスを生む「プラスチック」は出していないんです。もちろん、そんなことは口にしませんよ、もっと怒られることが分かってますから。

令和4年11月15日

大村城南高等学校長 中小路尚也